

英謝野實先生為補

詩

翠微作

自明三十四年
己丑三十五年

ふり信

河井翠敏

³うた、あつはらふく草のあつあつと
まぶゆさそいこえん

萬草の土草に草の酒をいほし
さまやそえにきりぬ

³百草や草の草書しぐは山草の花に隣
の草を散りけり

そとばけて次よ流れた草も
の空に水の音しる

新しそとあやむかせの草は
白き浪をみたり

藤原あつとあつあつと
ふり信は真白し

つれせよとて 岸に 舟の 上り 路に 幸ひ 旅
かたさけし 杖

波うらる 玉笠 下れた 船は あり 浦島
かみよとくも たいぬる

葦原が かつしのし びりに 波を 如木の
うす月 暮る 旅まゝ

牛啼きと 柳めく 家書 長けぬ さはら
せりも 歌に 百舌 ありむ。

せむ 西衣 離れ ちの 舟は 長けぬ 舟
の 端は 月に 入る 舟

舟の 岸に 船の 離れ ちの 舟は 長けぬ
舟の 舟は 長けぬ

物ばやし 節はいさうに 詩賦はあはれ 和歌
月夜はなごころ

こぼれゆく力はあまの 柳林 せいのまに
またあはれ世あはれ

ふゆのせのちたれねいとも 君かたむね
こころはあはれ 夢はあはれ

七賢のいごも ねるもあはれ ちよあはれ
つれよふ 新そご 末ご

せめあはれいごにいごにいご ちよあはれ
うのちたれはあはれ ね

しるあはれにいごのいごあはれ
いごあはれあはれあはれ

歌 稿

社友

河野翠漱

またさらば言はれぬまはまどひは歌の生命を
神におにま

いふたびを神はれ水降し
はるかざし

むらさきの歌水をはいまさらば筆のときめと行を
そまか

まがはたはよきに
おまのま

かへく来む詩の魂待つ
石抱く

あまの

いかに
いかに
詩の
子

の民水や

津と

京の女おあぶるに

水より

いづれに

は~~京~~珠と散る(言ねの流)

~~中流~~山の岩

まねこの谷間をながるるよひに

京の女

いかに流をとしとんる(言ねの流)

執るいこの清水さむら~~賞~~たむら
はみ肩を廊にかせ君(よくはらふまをたむらひの知もみちたといふ)

ある社

ひて、何ん

優柔豊

豊の佳作

と得まは

あや

大佛の元せば両雲女の啼びて 京の大社も
閑とあまねか

自然^{ゆげん}流き 財にやいふか 名~~お~~岩の傍

斗堂をりも 真^まは祝のわれ

得しや何、おしんが塚の結ひ~~結~~事^{あや}
子に人のあづらよ京(おしんは手か真花 平ひ)

歌集

河野聖子歌

あつぎふ世にのぼける説きもや家なほよこを
か田ひまらし

たうひのいたる夏ひゆる朝も秋の便人
はうたかひをめし

うかばは目もあやなもあらしね、ゆれと
斗麻呂がゆのかんはこしし
天路を

甚も得じかまこと詩みらこヤロツトか鏡
れしも運命を言ふむ

口を衝きの放し、けもあやもをり

盃やまたふたたびわらわへるまじ地帯ひは
友よさげし

泣きさし止ま心止むとせか友よ牡丹
あつぎに横む実ありそや

油 ^カ 子 抱 友 の 程 ^カ 也
に 一 裸 々 の 子 也 見 了

カ 子 抱 友 打 子 子 子 の 上 甘 味 子 子 子
身 古 時 様 も 宗 老 付 古 也

八 日 七 日 錢

歌集

河野翠波

あふらにはかたよめをまも 宿まむ 蝶よめの一
社をかたしむ

関にしも我を引くものありをんし 影のいとくに

さよふいれし

おしうせに 俣にわをふあとしいれよさふが林
に詩一子あはしく

帰らんに夢のまよを 笠せしむけのまは雲のしん
あこふし

あまみ戸にたそがえのしけんしがたんに 返り
行く鍵もたぬ友

夕潮に月もゆるそきづのまを 海のみあ見
とつや契りし

一 廢のあらし石見やあまもこしなとせの
依に我をせせし

在の隈にひとりのかのいあうとらんて 遊しむ 竹の

トワリあん神

秋風がわんに村こましかきし名然か母のやまも
のうふ禍神

アウうがしんし志明にわねと拵がしれや闇の
あんのみを社にせんれし

目覚めをば更にたどりしおまを道つむしろ
夢なるむかしにんごめ

憐え書ききこらき珠とのこれ意遠げんの
~~明り~~ **以下再考**

泣くにあはなをいのちのわなをことばあし人の秋
かこたしむ

心 敗るの夜の間の闇のさあまのやまかきし
いしりにさかす
と思きた務めまたまたあま海のたのくも

みだしこおほく

よらばかさも短き神もさいはひやをのこえは
に荆棘を分る

いづちと行方の位のむさをげりや雁のちねに
こいらなる宿

おのづかたを嘆かしくちまはりのきしをい
野によふとふし草

はつるの浪華は雲に知らばうり大いサツ
アにぬばしを暮あふ

洞のふはぶ

問のウにつれあものありとてし待もま
はる人やうし

又君を失ひ後し晶子女史に
まのすゝめ

~~あはれ~~
おのれもなごみ袖も
たはちし秋の
いしほ
はきまきしあはれ

あはれ
おのれもなごみ袖も
たはちし秋の
いしほ
はきまきしあはれ
あはれのあはれ
あはれ
あはれ

世の人にふく斗まふがれ果のしま成にしよのか
まろら富土が縁

はたをせをつあつ来し母子をいかに歌あはは
大サつゝいひまき

よとせめて王者孔雀の朝雲に赤玉よま
音を流しきまき

けくえがし道ふたりか初縁に雪の大野
いふさひこけり

よのき立思は
せはき一古年
いふさひこけり

あしせう石きま友のとききをも時目に
りし林のうくれ家

友よびて古者浪華よあだにこそしかり
し我やあるのみいなり

鏡幹

ワモ吟のうらとをよも松像せしわぬ。
今こに歩お進みらぬらぬや

日先にはわが妻の夕暮を人への文に秋はあがり

人妻を離る務わたり九月五日江川七尾うたに

層塔の月つ夕を影踏みで清き流に蓋の穂

京にあふし海雲よりと筆はえさねたや今宵は

鐘をききて木枕月に指一思木之仰いで秋夜

秋の子わがこは興ありの處分にはくさ縮あなを
大はかぢりたり

わが歌のみたれいふかる君あら胸の胸は

秋のこぼれはのこりの秋禮や夕日と照る地

意ふらばはまのまの斗逝いて胸の血の

冷めよと泣きぬ
奈の子が紅さいとまのたまごの幼あんな
ふるき日記くる

以上 二檢あり

十二月十日

社友 石見巻智由所村 可也 岩倉

師長 誠

○怨歌

河野羽千歌

おぼぬ人のいしりの板やたうつ、あき身のほほに

月楼に歌舞管絃の夜は更けも其は元とやぐら

つりさ

竹の月の垣や 疑りしを 捨つたまことやあが

さこ女やいこの自詠の果美しいかおれ斗

道をたると 鞭の羊のいたく 花菊の夜にあり

一紙あれち

m 夕のくぬこの院、さあ板の さあきまごいにあく
十のあへぬ

あき、其夢みこのまごいに消えたりき人の野り
あき、いひをち

m

はいふ、われも有情の子とあはれも、文毅焚り

え 堪 秋

m

夜かすて五更の鐘は人よらぬ竹の葉あはれつ葉

月のあや

ふ

さこわたる屋のまに、行く音あり 櫛のあたり

は昨日を問ふ

とくちほ 袖の雲は月を香や夕連連の空橋

ろき

籠の火影 馳ちる契つ人宵月傳月は「里變」

依き

m

行く秋の恵木戸あけて流三里早瀬を舟に

のり

連れ給へる心、一板とあゆまな板を夕へにうつ

のわたるあり

竹の浦に書ふたふ夜のいきたあきあきまごいに

秋は

流りゆく川の淵に花かきて 咲きよの如

らど 花史の片鏡

又生硬の石のつらし

そとよらて 花史の片鏡

あつた *何よりよるや* 今たぬ

之が原なる文字の他人の用や 詞を養ふははあ

今をばや 花史の片鏡

下る 花史の片鏡

高きや 相たづさく 花史の片鏡

思ひ 春月 花史の片鏡

かまさけや 神のたまひ

たし 思ふ 花史の片鏡

わ木さや 花史の片鏡

つやけの 花史の片鏡

世に 似たる 人見

あがき 花史の片鏡

しやに ぬ子の 涙を 向く

ぬき 花史の片鏡

おろ 花史の片鏡

花史の片鏡

花史の片鏡

花史の片鏡

花史の片鏡

花史の片鏡

花史の片鏡

花史の片鏡

花史の片鏡

花史の片鏡

花史の片鏡

花史の片鏡

花史の片鏡

ぬきつらさうさうとて家へ一葉を
おをめぐらしてはせえ

後世に人の世に嘆嘆の世に

うまよこ日本を

又まよこに感謝の歌を

まよこを

同様に

昔が病せりく名き二分

こりーの友へ松より

このよさをあはしける

そはなご

あまの神代書

ちかまよこ

さけり

五日

うまよこ日本を
又まよこに感謝の歌を
まよこを
同様に
昔が病せりく名き二分
こりーの友へ松より
このよさをあはしける
そはなご
あまの神代書
ちかまよこ
さけり

あまの神代書
ちかまよこ
さけり

五日

飛出し旅の御札に

翅折らぬし小社の

的まらぬとまたらぬ

魚御か今かあからかぬか

業の定人かの御札と白

道徳しきたりか

友はあたるか御札

行く御札に御札

御射かの御札に御札

とよまの御札に御札



馬の御札に御札

御射かの御札に御札

今さらあたる御札

あたる御札に御札

御射かの御札に御札

御射かの御札に御札

読人の御札に御札

御射かの御札に御札

小社の御札に御札

御射かの御札に御札

御射かの御札に御札

御射かの御札に御札

御射かの御札に御札

御射かの御札に御札

御射かの御札に御札

御射かの御札に御札

御射かの御札に御札

御射かの御札に御札

御射かの御札に御札

長詩

月出づ

河野翠波

いましう銀の雪降きて

夢見——さながらおほなる

緑の産にありといふ

青野の夢に似し様や

はたしろ百伝の花のいろ

乳のしたうの夏うらまきまあはしあの

くやうしらのたの色

表のあまたのものがけに

頬ほ青あおの人は遊あそびしこみ

陰よ村むらの寝ねも寂さびしき村。

五五、雪更ゆきさらに男おとこをたて

乳ちのいろやに白しろ々と

意い記ぎ四よ方ほうにああり

男おとこははははととふふし

男おとこ女めのこららししと

迎むかへのこららししと

定さだのまああははままたたし

鑄新流

402.